

神祕主義の語義について（一）

著者	川? 幸夫
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	17
ページ	1-15
発行年	1984-03-31
その他のタイトル	An Etymological Investigation of the Word "Mysticism" (1)
URL	http://hdl.handle.net/10112/16037

神祕主義の語義について (一)

川崎 幸夫

波多野精一はその著「宗教哲學」において次のやうに述べてゐる。

「神祕主義が何であるかは學界に於て現在最も盛に論議される問題の一つである。今この問題の解決を試みるに際して、先づ鹿を追ひつつ山を忘れることのない爲めに、吾々は、名稱の語義や語源に糸口を求めるあらゆる解決を、少くも一應は、遠ざけねばならぬ。神祕主義は、ギリシア語の源にまで遡れば、口を閉ぢるといふ意味の一語(即ち *mein*)より發し、従つて語義上よりは、秘密を守り又は主張する態度や教などを意味するのであるが、専らこの點より解されただけの神祕主義は、必ずしも宗教にのみ限るを要せぬであらう點に於て、すでに學問上の用語として餘りに曖昧の譏を免れ難い。吾々は宗教的現象としてそれを見、その眞相を明かにせねばならぬ」。(全集第四卷 一〇八頁—一〇九頁)

驚くほど率直な見解である。しかし問題がそれほど單純明解に片附くであらうか。もし神祕主義の語義がここでいはれてゐるほどの

ことで盡されてゐるのであれば、私も同じやうに「口を閉ぢ」て、ただ山を眺めてゐればよい。しかし風雅な趣を漂はせる鹿は孤獨な旅人を誘つて仙境深く分入らせ、山の眞髓を味はせてくれる先導者となるに違ひない。波多野が語氣鋭く一刀兩斷し去つたかの如くに見えるにも拘らず、「神祕主義」といふ「名稱の語義や語源」が「學問上の用語として餘りに曖昧の譏を免れ難い」ままに放置されてきたことが、神祕主義の「眞相を明かに」することを「遠ざけ」てきたのではなからうか。

「名稱」といふものは意外に多くの眞實を語る。一つの名稱はそのクラスに屬する無数の個物を集め、自らが集めたものに存在を與へる。しかしまた人は名稱のゆゑに多くの過誤をも重ねるのであらう。まして名稱の「語義」が不完全であつたり、謬つて理解されてゐるならば、「神祕主義の本質規定」(一〇九頁、一一〇頁、以下若干例)への試みは徒らに過熱するばかりで、われわれの腦細胞は少しも涼しくならない。波多野精一のいふやうに、「神祕主義」とい

ふ名稱の語源は一般に「口を閉ぢるといふ意味の」ギリシア語動詞 *mnemai* に由來すると説明されてゐる。しかし果してさうであらうか。このやうな點に對する疑問から出發したのが小論である。もとより名稱の「語義」を明かにするだけではたしかに「問題の解決」にはならない。しかし「神祕主義」といふ名稱の「語義」が見究められないままに「神祕主義が何であるか」を「論議」して一體何になるであらうか。「語義」を確定することは論議の空轉を止め、少なくとも「解決」への「糸口」を與へるのではなからうか。

一

哲學や宗教の領域において出現した或る特定の教義や思想上の動向の本質を明かにしたり、さまざまな立場に共通した一般的な問題を考察するためには、それぞれの立場を表示する名稱に含蓄されてゐる意味内容があらゆる角度から把握されてゐることが必要であり、またそれぞれの問題において取扱はれうる事象を包括的に表示してゐる概念が豫めできるだけ厳密に定義されてゐなければならぬ。たとへば神祕主義の本質とか、哲學における神祕主義的方法の意義とかを規定しようとする場合、恣意的な結論に陥らぬやうに用心するためには、何よりもまづ「神祕主義」といふ名稱の意味が明確になつてゐなければならぬ。それと同時に、神祕主義の特色を規定するためには、神祕主義以外のさまざまな立場とも共通する一般的な問題を表示する、存在とか認識とか、言語や生命といった基

本概念や、神祕主義者にとつて無くてはならない、魂・淨化・光・永遠・直觀・合一・脱自・體驗といった神祕主義特有の概念が透明に語られるやうになつてゐなくてはならない。

ところで或る特定の思想上の立場を表示し規定するためにつけられた名稱は、通常そのなかに、相互にかなり異なつた意味内容をもつ他の名稱とも結びつけられた若干の特殊形態を含んでゐることが多い。「神祕主義」という名稱を例にとつても、ギリシア的とか、キリスト教的とか、イスラム教的とか、或いはまた自然的とか、哲學的とか、感情的といった形容詞による附加的限定が可能であるだけでなく、或る一つの名稱はしばしば自らが表明する立場に否定的な他の立場を主張する別の名稱とも直接に結びつけられてゐる。たとへば、キリスト教における啓示信仰は多くの場合に神祕主義を烈しく拒否するにも拘らず、パウロやキルケゴールに關して「信仰神祕主義」といふことが語られる。さらに推理といふ間接的方法によつて絶對者を認識せんとする哲學的思辨が直接知を標榜する神祕主義と結びつけられて、僞ディオニュシオス・アレオパギータやエックハルトに關して「思辨的神祕主義」といふことがいはれ、またラッセルは「全體としての世界を、思想によつて想定しようとする試み⁽¹⁾」である形而上學から生じた相異なる二つの方向として宗教（神祕主義）と科學（論理）とを區別しながら、パルメニデスやヘーゲルのごとき「偉大な神祕主義的形而上學者たち」の立場を「論理的」と名づけても差支へない神祕主義⁽²⁾と呼んでゐる。

このやうに卒爾の間に瞥見しただけでも、神祕主義といふ名稱はさまざまな角度から實に多様な意味で語られ、これらの相互にまつた關聯がつけられないほどの雑多な規定が混線したままで、「神祕主義」といふ一つの名稱に附加へられてゐる。このやうに哲學や宗教における或る特定の立場を表示する名稱は多くの場合定義上のアナキズムに陥つたままで使用されてゐる。ところがこの種の名稱の定義の問題をさらに厄介なものにするもう一つの事情が加はる。それはこれらの名稱が絶えざる論争の渦中に曝され、そのために激しい情念によつて變狀を蒙ることが珍しくなかつたといふことである。たとへばプロテスタントとかニヒリズムのごとく、名稱自體がこれに敵對する者の側から命名されることも多く、名稱そのものの成立に最初から否定的な觀點がこめられてをり、したがつて名稱の定義自身に否定的な評價が入つてゐる場合が決して少なくはない。したがつて或る特定の立場を表示してゐる名稱を肯定的に定義することはそれに對立する他の名稱に對して否定的な評價を下すことを避けて通れないのである。それゆゑに過去の傳統を否定せんとする何らかの仕方で異端的な立場の名稱を定義することは一種の戰鬥的行爲となり、二つ以上の名稱の定義を相互に關聯づけることは當然のことながらすぐれて政治的な配慮を必要とすることになる。かくして思想上の或る特定の立場を表示する名稱を定義することはまことに容易ならぬ相貌を呈してくるのである。

それから哲學や宗教における基本概念の定義についてはいかなる

事情が見出されるであらうか。アリストテレスはその著「形而上學」のZ巻において、「有るといふことはさまざまな意味で語られる」(τὸ ὄν κείνῃ ἑκάστην ὁμοίως) としはしは注意を喚起してゐるが、*εἶ*といふ概念は最高度に普遍性をもつがゆゑに存在性の段階の相違に應じて多様な仕方でも語られるのである。このことは *εἶ* といふ一つの單語だけに限らず、哲學や宗教において使用される基本的な術語のほとんどすべてに妥當することであらう。

およそ思惟といふことを可能にする道具としての概念が抽象的一般性に高められれば高められる程、その適用領域は増大し、さまざまな文脈のなかに位置づけられて多義的となる。したがつて或る一つの基本概念を定義するためには、一箇の概念に含まれてゐる多様な意味を相互に關聯づけるだけでなく、さらに多様な意味の根柢にあつて、しばしば自らは語ることなくして全體を一つに關聯づけてゐる原本的な事態を見出し、かくして多様な意味の間の一即多、多即一なる全體的構造を明かにすることが必要になる。しかしながらこのやうな手續きだけでは *εἶ* のごとき高度の包括性をもつた概念を定義するにはまだ不十分である。このやうな概念はまたそれぞれ多様な意味で語られる若干の同義語と反對概念との間に同一性または反對關係において規定されてをり、このやうな一聯の諸概念によつて織りなされた網目模様をなかに位置づけられてゐる。かくして或る一人の思想家によつて語られた或る特定の基本概念を定義するためには、意味聯關の上での多と一のほとんど無數の組合せが重

なり合つて構成されたテクストの全體をあらゆる角度から分析し、このやうなさまざまな組合せが照射し合ふなかで自らの内に包蔵されてゐる意味の多様性を全體的統一にもたらしすことが必要になるのである。

しかしながらこのやうな基本概念を單に或る一つの思想體系を構成する記號的要素と見做すだけでなく、哲學乃至神學における基本的な問題の一般的表現として把握するならば、かかる問題の本質をその全體性において考察するためには、古代から現代へと傳達されてきた意味の歴史的展開の軌跡を視野に收めた上で、當の概念が定義されるのでなければならぬ。しかし勿論さうはいつても、西洋といふ廣大な世界において、高度の普遍性をもつて語られてきたやうな術語の意味の傳統はもとより單純な一本の線で描ける筈はない。パルメニデス以來、西洋の世界においては存在と思惟とは同じ一つの事柄に屬し、思惟は言語なくしては不可能であるとされてきた。それゆゑに言語は存在の眞理の宿る場所として、西洋の世界そのものを一つの統一をもつた世界として開示し、さらにその歴史を形成してきた根源的な力であつたのである。

西洋的思惟の傳統の核心を形造るものもその基本概念の枠組を築き上げてきたのは、いふまでもなくしばしば對抗關係に置かれてきたプラトニズムとアリストテリズムといふ二つの對極からなる理性の形而上學である。しかし存在者全體を一元論的に把握せんとする形而上學の内部には、形而上學の次元をも超出して、さらに自らの

始元的な根源に還歸せんことを欲する神祕主義への方向が含まれてゐる。このやうな方向は新プラトン主義によつて現實化され、神祕主義によつて意味が變様された形而上學の基本概念がヘレニズム經由でヨーロッパ世界に流込み、さらに降つてはシリア、アラビア經由やヘブライズムをとほしてラテン中世に傳達された。他方において、神祕主義への方向が発現するのに先立つて、存在者の或部分に妥當すべき原理の學として第一哲學の低位に位置づけられてきた自然學が單なる「第二哲學」の地位に甘んずることを拒否し、形而上學の外に向はうとして感性的經驗論への方向を現はしてくる。ところが新プラトン主義の哲學と並行して展開された教父哲學において、ギリシア哲學とキリスト教信仰との内面的結合をとほして、實在概念と、それを思惟する人間精神の態度に根本的な變化が生じた。このやうな西洋哲學における基本概念の歴史はキリスト教をはじめ、ユダヤ教やイスラム教の神學における術語の歴史と絡み合つてをり、同一の單語ではありながらその意味が多くの點で決定的に轉釋され、さらにその影響は近代にまで及んでゐる。以上述べたやうな意味の重層的發展を明瞭に認識することなしには、或る一つの概念をとほして表現されてゐる基礎的な問題をその眞理性において把握することは甚しく困難であるといはなければならない。

(一) B. Russell, *Mysticism and Logic*, P. 1

(二) *ibid.*, P. 8

これまでは西洋哲學およびキリスト教神學におけるもつとも基本的な概念の一つである *ism* という語を一例としながら、西洋的世界の成立そのものにかかはつてゐる基本的な概念に對する定義を、できるだけ十分な仕方でも能にする條件を述べてきた。勿論煩雜な考察を一切抜きにして自分一箇の立場に立ち、事象そのものに直接する現場から論議を單純化して定義を下すことも可能である。また歴史を超越して、歴史以前の永遠の場に立つて、神ともにもある概念の論理學を展開することも考へられないわけではない。しかしいかに裸の事象といへども歴史の外に立ち得ないことは明白である。また純粹經驗の判斷を據所として超越的概念の定義を下す場合に、根源的一性に生きてゐる主體といへども、學の傳統を形成してきた思惟の歴史が現在化した尖端に立つてゐるのである。

概念の定義の場合と同様に、思想上の或る特定の立場の特性を、可能なかぎりその全體性と完全性において規定しようとする場合にも、ほぼ同じやうな解釋上の手續が必要になるのである。西洋において、或る特定の教義や思惟の一定の傾向は多くの場合 *ism* という形で表はされ、通常「……主義」もしくは「……論」と邦譯される。このやうな *ism* という語形をもつ名詞はいふまでもなく近代語において出現したのであつて、二千年以上の傳統をもつヨーロッパ的思惟の世界においては、精々二三百年くらゐの

歴史しかもたない新しい表現形態である。このやうな長い歴史の最後の十分の一の時期になつて突然猛威を奮ひはじめた、さまざま *ism* という一種の實體的な概念によつて、このやうな規定意識をもたなかつた過去の大思想家の含蓄に富んだ言語宇宙を規定しようとすることはしばしば小賢しい空論に陥り、思想家の經驗から遊離した單に戰鬪的なイデオロギーに改編することにをはりかねない。

一般に近代語の *ism* という名詞は語源的には二通りの仕方
で説明される。その一つはラテン語乃至ラテン語化されたギリシア語の形容詞の最上級の語尾形である *ismus, -a, -um* に由來するとされるものであり、もう一つはギリシア語の *genos* (……化する) といふ語尾形をもつ動詞より派生した *genos* といふ語尾形をもつ名詞から由來するとされるものである。たとへば *barbarism* といふ名詞は *barbaricos* (ギリシア語をブロックンに謀舌る、粗野なもの) の言ひ方をする) といふ動詞から派生した *barbarajus* (ギリシア語を正しく話さないこと) といふ名詞に由來してゐるとか、計算や推論を意味する *calorajus* が *caloricesebae* (二箇の前提から結論を引出す、推理する) といふ動詞から派生した) ことである。この場合には、*ism* といふ語は人間の或種の具體的な行爲もしくは態度を産み出す或る特殊な性情もしくは價值觀を意味し、ほかの *ism* といふ語には見出せない一種の絶對化された表現となつてゐる。

これに對して、ラテン語形容詞の最上級が近代にいたつて名詞化

されたものとして説明される場合には、“...ism”といふ語は如何なるニュアンスをもつであらうか。たとへば mysticism といふ単語を例にとるならば、それは mystical といふ形容詞の最上級が名詞化されることによつて形造られたのであるから、最高度に mystical な教説を意味することになる。いふまでもなく思想もしくは體驗の内容としての mystical な要素は所謂 mysticism 以外にも到る處で判然と見出される。それは mysticism としはば混同される pantheism や occultism のなかに見出されるのと言ふまでもないが、理論的な哲學であるギリシアやドイツの idealism もしくは monism にも、したがつて mysticism には否定的である筈の rationalism をおろつてやゝ本質的な要素として含まれてゐる場合がある。さらにはまた mystical な要素は神祕主義に對する最も惡意ある敵對者である啓示に對する歴史的信仰を強調する theism においてもしはば活潑に息づいてゐるだけでなく、一般の豫想を裏切つて atheism や nihilism になつても看取されうるのである。このやうに一見 mysticism とはまじりなく無縁であるやうに見えるさまざまの立場におつてやゝ mystical といふ性質は含まれてゐるが、しかしながら mysticism 以外の立場では mystical な要素乃至傾向は主導的な地位を占めたり、主題化されるには到つてゐない。このやうに mystical な要素や傾向を含んださまざまの立場のなかにあつて、mystical といふ特色が最高度に現實化され、もつとも明瞭に表出されてゐる教説が mysticism といはれるのである、といふやうに

理解することができやう。

したがつて mystical な要素をもつた主義主張は決して mysticism と規定されてゐる立場にだけ見出されるのではなく、所謂 mysticism 以外のさまざまの立場や、さらに場合によつては mysticism とは相反する立場にまで、しばしばその基本的な構成要素として含まれてゐるが、しかしこれらのなかにあつて、もつとも本來的な形で、もつとも純粹で充實した形で mystical な要素が表明化された立場が mysticism と規定されてゐるのである。それゆゑに、他の“...ism”においては、mystical な要素は單に潜在的な傾向性乃至部分的な役割を果すにとどまつてゐて、他の要素の支配下におかれてゐるのに對して、mystical な要素が他の要素への傾向性を打ち破つて主導的な地位を獲得し、完全に顕在化してゐるのは mysticism の立場においてのみ見られるのである。したがつて逆にいへば、mysticism のなかに、mysticism の立場と矛盾する可能性をもつてゐて、他の“...ism”において最高の表現形態が見出されるやうな、別の形容詞によつて表示される他の要素も含まれてゐることになる。“...ism”といふ語が形容詞の最上級を名詞化することによつて語られるやうになつたといふことの意味は以上のやうに考へることができるとはなからうか。

上述のやうに近代語の“...ism”といふ語がラテン語形容詞の最上級に由来するものとして説明されてゐる場合には、それは當の形容詞が表示してゐる或る特定の立場を排他的獨占的な仕方では主張す

るものではなく、他の“...ism”との區別はどちらかといへば相對的見地から印づけられてゐる。たとへば atheism といふ語を例にとつても、atheistic な要素乃至傾向は無論それと極めて近い關係に立つてゐる nihilism や anarchism の内には強く現れてゐるといふことはいふまでもないが、それ以外の rationalism や idealism、或は empiricism, pragmatism, positivism において、更にまた materialism や historicism においてもしばしば顯著な仕方で見出されてゐる。また逆に theism といふ術語は哲學や神學における一般の立場を表す realism, voluntarism, monotheism, authoritarianism, fideism といふた單語と内容的な聯關があり、また宗教史における christianism, judaism, islamism などはその特殊形態を提示するものといふやう。

ところで“...ism”といふ語が日本語に受容されるに當つては、ラテン語形容詞に由來する單語の方は「……主義」とか「……論」と翻譯されることが比較的多い。「……論」と譯することが原義にふさはしい場合には、たとへば dogmatism とか scepticism などの場合のやうに、どちらかといへば或る特定の立場や態度を客觀的に規定してゐる語が多いやうに思はれる。これに反して、形容詞の最上級から派生したといふ語源的な由來が顯著に窺へる語が「……主義」と譯される場合には、もともと他の“...ism”といふ語との間に或る程度ゆるやかにつけられてゐた差異を暴力的に絶對化するやうな感じが生じてくる。「主義」といふ日本語はおそらく或る立

場を根本義としてゐる主張・學說・信念といふほどの意味であつて、意味の上からいへば必ずしも排他的な性格のものとは限らないであらうと思はれるが、しかしその「主義」といふ日本語がもつてゐる語感には非寛容な響きが漂ひ、一種の絶對性への主張を伴つて迫つてくるやうな強制力が附纏ふ。勿論このやうな事情は日本における議論が主として翻譯語に依存して行はれ、西洋語における固有の意味に對する十分な考慮が缺けてゐるといふことにだけ責任があるのではない。西洋においても、歴史的な知識が缺けてゐたり、正しい事實認識に立脚することよりも感情的動機や利害關係を先行させて議論が行はれる場合には、概念のもつ豊かな多様性が一面的な視野のなかに狭められてしまふことがあるに違ひない。たとへば互ひに共通點も決して少なくない mysticism と rationalism、或いは mysticism と客觀的啓示に基く神信仰とを敵對的な關係で捉へて、二者擇一を迫るがごとき事態に陥らせてゐるやうなことは珍しくない。しかしヨーロッパ言語の語彙における歴史的含蓄にあまり注意を拂はない日本においては、上述したやうな“...ism”といふ形態の單語の意味を深く知らないまま「……主義」と翻譯してきたことが、一面においては却つて日本の急速な近代化に貢獻したともおそらく言ひうるであらうが、そのことが同時に、性急な判斷を振りかざすことになつて、思想の十分な理解と日本語の正確な表現に大きな弊害を與へたともいはねばならないのである。

他方において、近代語の“...ism”が語源的には“...deism”といふ

語尾形をもつギリシア語動詞より派生した“*···ismos*”といふ形をもつ名詞から由來すると説明される場合についてはどのやうに考へられるであらうか。この點についてはあまり多くの事例が見つからないためにはつきりとした見透しがつけられないのであるが、僅かに擧げられる barbarism や syllogism といつた名詞は別に或る特定の主義、主張を意味してゐるわけではなく、所謂イズムとはまったく無關係に見出されるところの人間の或る種の性情なり、或る種の普遍的能力を指してゐる。

たとへば近代語の barbarism といふ名詞は言語の使用において教養人としての資格を缺くことを意味する *Barbarismus* といふ名詞に由來するが、この名詞は *Barbarismus* といふ動詞から派生して「*Barbarismus* すること」を意味し、そのことによつて個別的な行爲をなす *Barbarismus* といふ動詞の根柢となる普遍的な相をとらへてゐるといへるのではなからうか。このギリシア語がラテン語に受容されて *barbarismus* といふ名詞になると、教養人の使用すべき言語には當然ラテン語が加へられて、ギリシア語とラテン語によつてなされる陳述における粗野な語法を意味するやうになる。アウグスティヌスが「告白」第一巻において、少年時代の古典文學の學習について語つてゐる箇所で見出される用例 (XVIII, 28; XIX, 30) は正にこの意味であらう。近代語においても、フランス語の *barbarisme* の場合には粗野な振舞は依然として言語使用の範圍に限られてゐるが、英語に取入れられると意味が擴大され、言語使用の場合だけで

なく、人間の行爲一般や生活、さらに社會の風習といふ廣い範圍における粗野な振舞をさすやうになる。

次に、計算や推理を意味する *λογισμος* とか *ουλογορισμος* といふ名詞も同様の手續で動詞から派生した語であると思はれるが、この場合には名詞化による行爲の普遍化がさらに進められてゐて、個々の *λογισμος* といふ行爲がそこから引出される能力とか、個々の行爲がそれに遵つて成立しうる規則なり方法といつた普遍的な觀點が入つてゐる。このやうに僅かな例を検討しただけで結論を出すことは甚だ早計との譏りを免れないのであるが、ギリシア語動詞に由來すると説明されうる場合の“*···ismos*”は、或る特定の行爲が反覆されて人間の習慣と化し、そのことによつて行爲する主體にとつて習慣化された意識となつてゐるもの、すなはち性情を表示してゐると見做しうるのではなからうか。

三

mysticism といふ近代語の意味を明かにするために、一般的に“*···ism*”といふ形態をもつ近代語の語源的な由來を探らうとして、大變な道草を喰つてしまつたが、或る特定の思想傾向を一括して“*···ism*”といふ語尾形をもつ普通名詞によつて規定する習慣が生じてきたのは、曩にも述べたやうに、近代性の原理が十分に花開いて、ヨーロッパ文化に對する歴史哲學的意識乃至世界觀的反省が芽生へた時期である十八世紀に入つてからのことである。たとへば

mysticism という單語の場合には、The Oxford English Dictionary の第六卷をみると、そこに擧げられてゐる一番古い用例は一七三六年のものであり、そこでは *ecstasy* (脱我) と並列されて、同義語として語られてゐる。これに對して、*mystical* という形容詞や *mystically* という副詞は數多くの用例が既に十六世紀前半から十七世紀にかけて途切れることなく載せられてゐる。このやうに形容詞や副詞の方が名詞に二百年以上も先立つて瀕出してゐたといふ言語的事實から、或る一つの “*ism*” という名詞が語られるやうになる背景には、人間精神の所産を一切歴史的解釋の對象と化する近代的意識の成熟と相俟つて、たとへば *mysticism* 以外の思想傾向を表示する他の形容詞との比較對照を重ねてきた長い経緯が浮かび上つてくる。このやうな形容詞が名詞化されて “*ism*” という形態が生じたのは、おそらく近代人の歴史意識に當爲の感覺が接合されることによつてであらう。

しかるにかかる接點を形成したのは十七世紀後半よりヨーロッパに輩出したさまざまな型の合理主義者たちであるから、十八世紀になつて盛に使用され始めた “*ism*” という近代語の根基になつてゐる形容詞がたとへ古代のギリシア語や中世のラテン語に遡るとしても、その最上級の意味内容として把握されたものは主として十七世紀に大きな影響力をもつたヨーロッパの思想を規準としてゐるといふことは自から明かであらう。したがつて十八世紀になつて哲學や宗教史の術語として登場した *mysticism* という概念も、十五世

紀以降に現れた近代的傾向の神秘家たち、特に十七世紀のヨーロッパ各國——イギリス、フランス、スペイン、ドイツ、ネーデルラント等——に簇生したさまざまな神秘家たちをモデルにしたがら語られるやうになつたらしい。これらの神秘家たちは感情の能力に立脚して、神に對する魂の受動性に徹して、純粹な愛によるキリストとの合一を強調するところに共通した特色があると考へられ、肉體がおかれた病的な條件のもとでしばしば幻想的な心靈現象を顯示したと受取られた。このやうな型の神秘家を代表するものと見做されたのはスペインのアヴィラのテレサと十字架のヨハネであり、またフランスのギュイヨン夫人であつた。さらに十八世紀になつて啓蒙主義がヨーロッパ全體を風靡するやうになると、哲學や宗教の世界から神秘主義の潮流が退き、ロマン派の詩人の天才的な感情に委ねられるやうになり、*mysticism* という言葉の語感にはますます主觀主義や審美主義の色合ひが深まつて行つた。

mysticism という單語に對する近代人の感覺と、近代英語において實際に用ゐられてきた意味の歴史に立つて、オックスフォードの辭書における *mysticism* という單語の意味は、肯定的に語られた事例に基く第一義として、次のやうに説明されてゐる。「神秘家たちのもつてゐるさまざまな見解、心的諸傾向、つまり思想と感情にそなはる習慣、特徴。神秘的な教義もしくは精神」と抽象的な規定が掲げられたのち、その具體的な内容が「忘我に導く觀想によつて、神的な本性との合一の可能性への確信。知性的な理解力によつては

接近しえない神祕に關する知識を獲得する手段としての靈的直觀もしくは高揚された感情への信賴」と説明されてゐる。しかしながらこのやうに規定された宗教經驗乃至思想傾向を *mysticism* と名づけた十八世紀のヨーロッパは超自然的な恩寵を否定する合理主義が時代精神となつてゐたため、*mysticism* といふ言葉は憧れの念も伴つた好奇心を混じへて語られた反面に、しばしば嫌惡と輕蔑の念を惹起したであらうことも想像に難くはない。それゆゑにオックスフォードの辭書は *mysticism* といふ語の第一義に、「非難の用語として」用ゐられた場合の語義を次のやうに掲げてゐる。

「a、敵意ある觀點から。神祕主義は自己欺瞞もしくは思想の夢見心地な混濁を含んでゐる。このことから、この用語はしばしばこれらの邪惡な性質がそこに歸せられるやうな宗教信仰に對して漠然とした仕方で適用される。b、時には、いかなる合理的な説明も與へられることができないやうな祕教的な性質や不可思議な力の想定を包込んでゐると斷定された哲學上もしくは科學上の理論に對しても適用された」。

さうしてこのやうな用例の一番古いものとして、「神祕主義の害毒」について語つた一七六三年のウェズレーの日記が擧げられてゐる。

神祕主義者の體驗や主張が分析的理性や科學的自然に對する否定を含んでゐると見られた以上、神祕主義を敵視する風潮は一九〇二年にウィリアム・ジェイムズが「宗教的經驗の多樣性」を刊行した時にも少しも變つてゐない。彼はそのなかで「神祕主義」と、神祕

的」といふ語は、漠然としてゐて、涯しく擴り、感情に訴へてゐる、しかも事實が論理のどちらにも基礎を下してゐないと見做すやうな意見にわれわれがぶつけるべき、純然たる非難の用語としてしばしば用ゐられる⁽¹⁾、と述べてゐる。

以上述べたやうに、英語の *mysticism* といふ單語には好意的觀點に立つ側からのと、敵意をもつ側からのと、相反する評價が合體してゐて、兩義的な仕方で使用されてきてゐる。この點ドイツ語においては、神祕主義の非本來的な形態である主觀的な奇蹟信仰や狂信的な惑溺の面には大體において *Mystizismus* といふ語が當てられ、哲學や高度な宗教における本來的な神祕主義をさす *Mystik* から區別されてゐる。大著「キリスト教神祕主義入門」を書いたツァーンによると、ドイツ語においては「神祕的生活の眞正にして健全な形態」と「さまざまな擬似神祕主義的な方向」とがはつきり區別され、前者には *Mystik* といふ名稱が、後者には *Mystizismus* といふ名稱が與へられてゐる⁽²⁾、と述べられてゐる。フランス語においては *la mystique* と *le mysticisme* もともに大體において眞正な形態をさす語として用ゐられてゐるやうである。しかるに英語における *mysticism* といふ語は學術用語でありながら語義のなかに相對立し合ふ評價が入込んでゐて、意味の混亂を惹き起す結果を招いてゐる。そのために「Encyclopaedia of Religion and Ethics, ed. by J. Hastings の MYSTICISM の項を擔當した Rufus M. Jones は英語の *mysticism* を同一の語でありながらドイツ語

における相反する性格をもつた Mysticismus と Mystik という二つの語の等價物すなはち同義語 (equivalent) として使はれるやうになつたために、「きはめて不確かな内包をもつた語」 a word of very uncertain connotation になつたと歎いてゐる。したがつて日本語において、英語の mysticism もしくはインテリの Mystik という語の譯語として「神秘主義」といふ言葉が語られる場合に、西洋の近代語における意味の兩義性に對する正確な知識をもたずに自己流の定義に依存すると、空疎な論議を開陳することに陥りやすいので、そのやうなことは十分に警戒されなければならない。このやうな日本的な事情はさて置き、mysticism の語義を明らかにすることを急がねばならぬが、そのために mysticism という單語の外延すなはちその適用範圍を鳥瞰しておかなくてはならぬ。

- (1) W. James, The Varieties of Religious Experience, Lecture XVII & XVII, "The Modern Library" ed., P. 370
- (2) J. Zahn, Einführung in die christliche Mystik, S. 14
- (3) Encyclopaedia of Religion and Ethics, ed. by J. Hastings, Vol. 9, P. 83

四

今まで述べてきたやうに mysticism という語のうちに本來的用法と非本來的用法とが混同されてゐることから、mysticism という名稱のもとに實に雑多な領域が含まれてをり、そのことが因でしばしば mysticism 全體がいはれなき輕蔑を招いたり、憎惡の對象

神秘主義の語義について (一)

となつた。非本來的な仕方では mysticism という語が誤用される場合には、惡魔信仰のごとき迷信や死の舞踏のごとき集團的な狂氣の現象をはじめとして、古代末期よりルネサンスにかけて人人の魂を凌つた占星術や數理神秘主義、いかがはしい鍊金術や麻藥などの擬似科學、またそれを學問の形態に高めた魔術的自然學や神智學、或いはあまりにも苛酷な肉體の苦行や心靈術の瞑想などさまざまな形態における靈性への集中、さらには反社會的分子の政治的・宗教的な秘密結社の運動にいたるまでの廣範圍な領域が、そこに含まれることになるのである。これらの現象はあまりにも複雑多岐にわたる、詳細に検討してゐる餘裕は勿論ないが、いま列擧したさまざまな領域においては、本來的神秘主義を成立させるためには不可缺な身體的原理から離脱した靈魂の觀念が確立されてゐないので、非本來的な神秘主義においては靈的存在と自然的存在との區別が曖昧である。さうしてそこで見出された自然の力も自然の斷片的にとどまるにははつてゐて、世界の全體的認識に結びついてゐないし、靈的な修練の方も世界超越と純粹な魂としての自己認識に到達しえないといへやう。しかしそれにも拘らず、そこには合理的認識の背後に隠された生命的原理を直接的に把握せんとする超自然的能力への強い意志が見出され、このやうな意味において神秘的といへる特徴が現れてゐる。したがつて非本來的な神秘主義は本來的な神秘主義のいはば裾野を形成してをり、それらは決して本來的な神秘主義とは無縁ではない。このやうに純粹に靈的な原理が確立されてゐる

ない非本來的な神秘主義に *mysticism* といふ名稱を冠せるのは、そこにやはり何らかの形で根源的生命の原理としての靈的な力が現れ、それが軸となつて人間と世界との交流が成立つてゐるのが認められるからである。しかし無條件的にそれらを *mysticism* と名づけるのは決して正しいとはいへない。

それでは無條件的に *mysticism* といふ名稱にふさはしい、本來的意味における *mysticism* の領域に含められるのはいかなるものであらうか。それはまづ地中海東部沿岸地域からペルシアにいたる廣大な空間に發生した密儀宗教であり、特に *mystical* といふ術語の起源となつてゐる古代ギリシアのエレウシスの密儀宗教やオルペウス教やディオニュソス崇拜である。これらの密儀宗教は地縁的血縁の原理にとどまつてゐた民族宗教の域を一步越えてをり、ここにおいてはじめて身體的原理から切斷された靈魂の觀念が成立した。さうして入信の儀式を通過して靈魂の淨化の過程に進み、その段階を上昇し、淨化が完成すると光に照されて見神が達成される。

以上の形態において密儀は組織され、このやうにして密儀宗教のうちにも本來的意味における神秘主義の原型が形成されたのである。

このやうな神話的世界認識を背景とした密儀宗教は古典期においてソクラテスやプラトンの説いた靈魂の不滅性と哲學的死によるイデアの直觀の根源をなしてゐる。プラトンにおける善のイデアをさらに一切の存在と知的直觀の彼岸へ超出させ、純粹な一者を原理とした眞正なる神秘主義の哲學を完成したのがプロチノスとプロクロ

スを頂點とするネオ・プラトニズムである。しかし一方においてプロチノスの弟子たちが密儀宗教の儀禮に關心を抱いたのも興味深い事實であらう。いづれにせよネオ・プラトニズムに代表される哲學的神秘主義こそ眞に本來的な意味における *mysticism* の名が適用さるべき最たるものである。さうしてヨーロッパの哲學がキリスト教から獨立した近世において哲學的神秘主義者として算へらるべきルネサンス期のフィチーノやブルーノ、シェリングとベルクソンらは悉く新プラトン主義の深い影響下に立つてゐるのである。

ギリシア文化に源を發する哲學的神秘主義とならんでイスラエルの宗教的傳統からも神秘主義の立場が發現した。原始キリスト教時代にキリスト信仰が形成される過程において、パウロによつて靈としてのキリストとの同時性の場合「律法の外に」*Χριστός νόμος* (ロマ書三—二) 開かれることによつて、啓示信仰と神秘主義とが一つに結びつけられたのである。その時代にあつてキリストに對する信仰告白を行ふことは直ちに神學的論争の渦中に立たされるといふことを意味した。ナザレの人たるイエスが神の子たるキリストであることを證明するやうに強ひられたキリスト者にとつては、信仰とは單に權威に服従することだけにはとどまりえず、歴史の唯中に現成した永遠の現在に立つて、「神の奧義なるキリストを知ること」(*ἐπιγινώσκω τὸν μυστηρίου τοῦ Θεοῦ, Χριστοῦ,*) (コロサイ書二—二) に進まなければならなかつたのである。パウロの唱へた「神の奧義を知る」といふことと「キリストを信ずる」といふこととの同一化

はヨハネ神學においてはさらに徹底されるが、ここに一切のキリスト教神祕主義の源泉がある。

やがてキリスト教がヘレニズム世界に浸透してゆくにつれて、キリストの辯證はヘブライズムとギリシア哲學との内面的結合を要求するにいたる。教父哲學においては、ギリシア哲學の概念と論理を援用した聖書解釋に基き、キリスト教の眞理概念を確立しようとするが、眞理認識をめぐつて對立し合ふ信仰と知性といふ二つの方法を内面的統一にもたらす方向に見出されるのは神祕的直觀においてであつた。かくして古代末期より中世を経てルネサンス期、さらに十七世紀にいたる長期間にわたつて、きはめて多彩なキリスト教神祕主義が開いた。このほか盛期中世にはユダヤ教とイスラム教を母胎として、ネオ・プラトニズムの高度に辯證法的な論理と結びついた神祕主義もヨーロッパ世界に重大な衝撃を與へ、その殘像はスピノザに及んでゐるのである。

以上のやうに、西洋世界における本來的神祕主義は密儀宗教と觀念論的形而上學、さらに高等宗教の各領域に現れてゐる。しかもそれはそれぞれの領域の成立そのものに根柢からかかはるやうな仕方では現れたのである。しかしこのやうな言葉の本來の意味における神祕主義は哲學と宗教以外に藝術の領域にも現れてをり、神祕主義の概念と歴史を語るためには、藝術における神祕主義の展望も見落してはならないことである。

文學の世界では、中世の初期にはじまるラテン語で書かれたキリ

ストへの愛を誦つた詩やキリスト受難劇などをはじめとして、戀愛を讀へた騎士文學や世俗歌謡にも、キリスト教神祕主義の深い影響が見られる。近世においては、哲學や神學の世界よりはむしろ文學において神祕主義の血脈が傳へられたのであり、ダンテとペトラルカはいふまでもなく、ゲーテの自然觀に對する新プラトン主義の影響も夙に指摘されてゐる。降つてはノヴァーリスやブレイクに代表されるロマン派の詩人、象徴主義のマラルメやクロードル、現代イギリス文學のイェーツ、さらにゲオルゲなどの抒情詩の世界に、神祕的靈性が活き活きと現れてゐる。

さらに眼を建築の世界に移せば、ゴチックの大伽藍は中世の神祕家の靈性を培つた祈りの場であると同時に、建築の構造そのものがキリスト教神祕主義のもつとも深い表現である。また中世初期の聖堂で歌ひ繼がれてきた讚美歌や、アウグスティヌス以來の音樂論の系譜もキリスト教神祕主義の重要な側面をなすものであり、大伽藍で響いたであらうグレゴリオ聖歌よりモーツァルトのモテットやミサ曲にいたるキリスト教音樂は、十四世紀ドイツの神祕家ハインリヒ・ゾイゼが経験した天使との合唱に深く通ずるものを感じさせる。彫刻や繪畫の世界でも、中世の素朴な聖像とガラス繪、聖者物語の場面の素描をはじめ、近代の本格的な繪畫でも、澄切つた天上の淨らかさを描きえたシオットーや幻想によつてキリストとの合一を表現したグレコ、さらに降つてターナーやルオーには素材のなから靈性が自由に迸出のを感じさせる。

今まで述べてきたことから明かになったやうに、mysticismといふ用語の適用範囲は、本來的意味において使用された場合に限つても、古代世界における密儀宗教、觀念論的形而上學および高等宗教から、さらに藝術まで含めたさまざまな領域にわたつてゐるのである。さうしてこれらの領域において mysticism の立場や傾向を代表するものとして算へられるべき多彩な思想家や天才を見渡すならば、mysticism と呼ばれる立場の特色は、純粹な一それ自體として見出された實在全體の究極的原理——多くの場合に神と名づけられる——と、一切の感性的原理からの脱却を完成した純粹な魂としての人間の間に、直接的な合一の經驗が成立してをり、かかる經驗に基いて實在全體が説明され、且つ表現されてゐるといふところにある。

神と魂との神秘的合一については、一般に人間的意識の内部における多様性の統一化をとほして成立つ主觀的性格のものと解釋されてゐる。たとへば波多野精一が神秘主義の精神に深く觸れてゐながら、神秘主義の「本質規定」を専ら「主體の側體驗の側より見」⁽¹⁾ようとして、「神秘主義がイデアリスムの極端化徹底化であることも明かと」見做してゐることである。しかしながら神秘的合一の經驗は「主體の側」からの直接的把握である直觀によつてのみ成立するものではなく、一そのものである客觀的な實在の側からの直接的な現前も不可缺である。否むしろ、直觀と現前とが一つの事實となるところに合一が成立するのであり、合一の完成である脱自におい

ては直觀も消滅してゐる。それゆゑに神秘的經驗は經驗の自己超越であつて、主觀性と客觀性との完き自己同一において成立するのである。この問題についてこれ以上追究するのはここでは適當でないので、神秘主義の立場の特色を一往このやうに了解した上で、このやうな性格をもつ思想傾向を表示するために用ゐられてゐる mysticism といふ用語の意味が本來的な仕方で使用されてゐる場合を、その語源と歴史的用法に遡つて考察することにした。

(1) 波多野精一、宗教哲學、全集第四卷一一五頁。

(2) 同 一三〇頁。

五

最初に述べたやうに、ギリシア語に由來するラテン語の mysticus といふ形容詞を最上級にして mysticism といふ近代語の名詞が造語され、ヨーロッパ思想界の用語として登場するやうになつたのは十八世紀になつてからのことである。したがつて mysticism といふ名詞の基本的な意味は、その根幹をなしてゐる mystical といふ形容詞の意味に見出されなければならないのである。

近代語の mystical といふ形容詞の本になるのはいふまでもなくギリシア語の *mysterios* であるが、この語が學術用語として盛に使はれるやうになつたのはアレクサンドリアの護教家であるクレメンヌスやオリゲネス、さらに教會史家として名高いエウセビオスなど西曆三世紀から四世紀にかけての所謂ギリシア教父と呼ばれる人人の

著作においてである。彼らはギリシア哲學の方法を援用した舊約聖書の象徴的解釋に基いてユダヤ哲學を樹立したピュロンを範として、最初の本格的なキリスト教哲學を形成したが、その彼らの著作においてはじめて *μυστικός* といふ形容詞が、一それ自體としての神性の在り方を特徴づけるとともに、魂による神認識の完成された情態を表す言葉として用ゐられるやうになつた。この場合注目されるべきことは、*μυστικός* といふ形容詞がただそれだけで單獨に出現したのではなく、*μυστικός* といふ副詞はいふまでもなく、*μυσταγωγία* (奧義に通曉すること)、*μυσταγωγός* (靈性上の教師)、*μυστῆς* (神祕家) といつた *μυστικός* (奧義) といふ語と密接な關係にある一聯の單語との組合せにおいて用ゐられるやうになつたといふことである。したがつてギリシア教父たちにおいても *μυστικός* といふ形容詞は *μυστικός* といふ語との密接な聯關において把握されてゐたのである。*μυσταγωγία*, *μυστῆς*, *μυστικός* といふ語は元來ギリシアの密儀宗教に由來してゐるが、ギリシア教父においてはいふまでもなくパウロによつてキリスト教的に轉用された意味の傳統にしたがつてゐる。

しかしながら、さらに進んで *μυστικός* といふ形容詞が哲學上、神學上の或る特定の立場を明確に主張する語としてはじめて使用されるやうになつたのは、五世紀の末ごろの人と推定される僞ディオニュシオス・アレオパギータであるといはれてゐる。彼は「神祕神學について——ティモテに宛てて——」(*Περὶ μυστικῆς Θεολογίας*)

πρὸς Τιμόθεον) といふ小冊子において、「神祕的」*μυστικῆ* といふ形容詞を彼の「否定神學」の立場を端的に特徴づける言葉として語つてゐる。さらに「神名論」(*Περὶ Θεῶν ὀνομάτων*) の第二巻においても、プロクロスの「神學要綱」(*τὰ Θεολογικὰ στοιχεῖα*) に言及しつゝ *μυστικῆ* といふ形容詞を用ゐてゐる。僞ディオニュシオスはこの語によつて、言葉を發する以前の暗闇と沈黙にとどまつて人格性の場をも超えた神的な無との直接的自己同一性を表現してゐる。彼の與へたこのやうな意味内容こそクレメンスとオリゲネス以來の語法の到達點である。それゆゑに *μυστικός* といふ形容詞のもつとも本來的な語義を明かにするためには、僞ディオニュシオスのテクストに即してこの語の用法を検討しなければならない。

(未完)